四季混雑 遠州流挿花百瓶之図

上

樹月庵一全撰校

古遠州流挿花百瓶之圖

全二冊

中村西彩題字
渡邊信堂序
山口月之畫

樹月庵一全大人ハ越前福井の士ニ
して遠州流挿花の道を同藩の宗
匠窓月庵一溪大人ニ受け藩の財政
ニ執掌の寸隙ニも之を業て清雅の
樂となし給ひしか致仕の後東京に

住み給ひしに當りて同郷の紳士貴女たち其技を歎美するの餘り集りて其教を請ふこと日に月に増して今は數百の多きに及ひぬ然るに大人の斯道に篤き後進を教へ導くの望ふかきと共

に師傳を永久にせんとて今年芳歳

七十と為ら給へし高賢饒たる千代

八千代を壽ほき為め其數へ子の勧せし

數千萬瓶の揮筆中より法に合ひ

て愛たきこその跡擇ひて梓に上せんとて

ども端書を余に請はれたり余花の
道に知られし親戚に大人の教授
受られし事多く余に篇文に於ては深
からぬ縁もあれば辞み難くてかく
は識しぬ

時明治丙申四月　浩堂學人

抑立花の起因ハ聖徳太子ゟ始り
中世東山義政公の時に至り挿花の法流に
分れ其一派のうちに小堀遠江守政一公の流儀
にして是を遠州流と称して小堀家世々
に相続して中世に及文化年中東武秋月庵

一志坊ハ六世の家元を道喜に譲られ文政年中
至り七世の家元道我ハ越前福井宮月庵一渓
師に継興せられたりし時再ひ至門より勉めて
此法の皆伝を受け益々其統を継ぎ安永
東都に於て諸人に教授して當流

挿花の法定して天地人を象ひしものも
作され侍りき其後より心月庵馬丈と云者の著されたる
たる挿花百瓶之図侍りしを世に流儀の乱れ
行くを憂ひ即ち示しつゝ其中数瓶の図をとりて
撰んで百瓶の図を作り法式を正さんに補へん

三歎して以テ初學の人此道を志す便にとて
綴りつゝ為題言

明治三十年二月

七十叟　樹月庵一今

發起　宗甫公

二番　不揣庵

三番　春秋軒

四番　春草庵

五番　春草庵

六番　卯月庵

七番　寒月庵

従五位下朝散大夫
小堀遠江守藤原政一

一　甫公　小堀家　東花園主人

一　葉公　仝

一　景公　仝

一　枝公　仝

一　太瑞　東京　羽田[illegible]

一　漢　麹町　玉福井　蒲生居士

一花一葉

三木
糀町一番町岩佐
水月庵一柳

躑躅

櫻
今井町
五十庵一画

白梅

藥研堀天神町
隅田一香

撫子

蓮
杜若
土番町濱通
秋月庵一泠

八重桜

菜の花

三田尻出所
飯沼寿仙

花菖蒲

本郷弓町

吉田愛人如隊

石躑躅

伽羅
枝ふとく
葉大きく

たかれ様

白桃

ハアイ公使様
アルウ井ーン遠山

銀座二丁目
西村一局

百合

越前福井

武田一爽

ねこ柳小きく

三田四国町

荘司花祥

青柳赤きく

東之書肆
高橋梅山

紫蘭

堀川所
太田松牧

英山きく

杜若
根谷町
山田

枇杷

南天白椿

越後国長岡

田邊一窓

神谷山春

山吹

美濃の国大垣
野村一湖

紅椿柳

摂州 神戸 須濱菱蝶

桜
西ノ久保
玉木一松

つりはなき白山茶花糸柳
紅大きく黄小さく
烏丸町加藤露渓

茶

梅

こぼれ松大きく

鈹屋
閑度一花

右樣

寒桜

にし町
田口三笑

馬蘭

繁若三月

山本

慶月居一敬

茶

越前福井
野村一峰

白椿

茶

黒もじ

白金臺町

大舘 春香

黄大きく

高尾紅葉

青山
如髪嘉壽仁

蘭

松
白椿
黄大菊

我古坊
小栗一秋